



TITLE:

<大會抄録>戦國時代楚文化の中の 鼎と敦：周邊文化との関連を主眼に みる

AUTHOR(S):

間瀬, 收芳

CITATION:

間瀬, 收芳. <大會抄録>戦國時代楚文化の中の鼎と敦：周邊文化との関連を主眼にみる. 東洋史研究 1984, 43(3): 568-568

ISSUE DATE:

1984-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153958>

RIGHT:

大會抄録

戰國時代楚文化の中の鼎と敦

——周邊文化との關連を主眼にみる——

閒瀬 收 芳

中國の戰國時代、長江中流域を中心に大きな勢力を築いた楚は、文化的にも、他の六國とは異なる様相をもつて發展した。本報告はこの楚文化の一指標として鼎と敦をとりあげ、主にその形態を通して、他の六國並びに長江下流、嶺南地方等との文化的關連を探ることによって、戰國楚の文化、社會の特質を考察してみようとするものである。

戰國楚墓からは、小型墓に至るまで、普遍的に鼎と敦が出土することから、戰國楚の興隆を支えたのが士人階層の充實であったことが推測される。又、この容器の形態についてみると、中原その他北方諸國の鼎の足が矮足化するのに對して、楚鼎の足は逆に細く長いものとなる。又、楚の敦は球形敦であり、三晉、秦にはみられないものである。こうしたことから、中原に對する楚の文化的な對抗、自立の姿が窺える。その對抗、自立を支えた力の一つとして、いわゆる百越族の文化を考えてみたい。即ち、楚鼎の足が中原鼎の矮足化に抗して逆に細長くなった理由を越鼎の影響とみたいのである。更にはその背後にある鼎に對する南北の意識の相違といったもの

のも探ってみた。

鼎と敦は副葬禮器のごく一部に過ぎないが、形態の變化、地域的相違が明白な容器であるので、その考察によつて戰國期の楚社會の特質がいくらかは明らかにできるのではないかと考える。

明清時代における養濟院と普濟堂

夫馬 進

明清時代には、恒常的な救済のための施設として、宗族内あるいは狭い範圍内でのものをのぞけば、養濟院を典型とする官營のものと、善堂とよばれる民間經營のものがあつた。兩者は經營主體の相違にとどまらず、「福祉」の理念から、資金の調達、經營の實態、さらに會計報告の方法にいたるまで著しい對照を示した。

報告者はすでに、民國の時代にまで續く善堂、これを支える善會がはじまつたのは、明末清初のことであるとの見解を示したことがある。善堂は續々と設置されてゆき、江蘇省などでは救済の實績のうえで、はるかに養濟院を凌駕するにいたる。ところが一方、はじめ民間經營として、善堂として出發したものが、官營化つまり「養濟院化」するケースもかなりあつた。普濟堂がその一典型である。ではいったい何故、民間經營のものが官營化し、自發的行爲「善舉」がのちに徭役と化するのだろうか。

今回の報告では、この善堂の官營化、善舉の徭役化に焦點をあて、養濟院の歴史と經營實態をおうことによつて、「養濟院化」の